

声の文化と文字の文化

山口 建治

書名にひかれて『声の文化と文字の文化』（藤原書店刊）という本を最近読んだ。ウォルター・J・オングという古典学者の著書の翻訳である。音声としてのことばしかなく書くことを知らない社会の文化（声の文化）と、ことばを書きあらわすことになっている社会の文化（文字の文化）との相違を探究し、前者から後者への移行が人間の思考や表現にどのような変化をもたらしただかを論じたものである。今ではもはや文字無しで思考することすらできなくなっている我々が、声の文化の遺産を偏見無しに見るにはどうすればよいか、どのようにあつかうべきか種々のヒントを与えてくれる有益な書である。

中国の文字（漢字）使用は、殷の甲骨文に始まるが、印刷技術の発達にともない営利的出版が盛んになるのは北宋時代（10世紀～12世紀）からだといわれる。これより本格的な文字文化の社会が出現したといつてよいであろう。爾来、声の文化と文字の文化の二極分化が進み、漢字を習得して知識を独占する知識層の文化と目に一丁字無き庶民層の文化が対立し、相互に影響を与えながら、中国文化を形成してきた。筆者流の用語に言いかえると、中国文化における雅俗の対立と相互影響である。ただ、この過程をただしく認識することは容易ではない。

第一、我々のように外国にいて、もっぱら書物を通して中国の文化を見てきた者にとっては、声の文化はほとんど視野、否、耳に入ってこなかった。我々の中国研究はつい最近まで、視覚だけが頼りの文字文化が対象であった。

第二に、中国内部でも、文字の文化が圧倒的に優位を占め、声の文化を正当に評価する者がほとんどいなかった。このため両者の関係を深く探究する人がでてこなかった。

「雅俗の対立」の枠組みをもちいて、中国の文化的な諸現象を見ていくことは有効でかつ重要である。しかし、一方では、「雅俗共賞」という、文字の文化と声の文化の落差を一举に乗り越えてしまうかのようなことばがある。知識層と庶民層の双方から歓迎されるジャンルあるいは作品を讀んでいることばで、出版書肆が通俗小説を出版するようなさいの宣伝文句に使う。ほとんど絶望的ともいえる雅俗のあいだの深い溝を無視できるかのような幻想を、このことばはふりまく。

昨年、天津で開かれた中国曲芸節（語りもの全国祭典）に参加した時にも、何かそうした鬱屈した感情をいだかされて帰ってきた。梅花太鼓という語りもの（日本でいえば、ひと昔前の人気歌手畠山みどりに太鼓を打たせながら浪曲風歌謡曲を唱わせているのを想像すればだいたいの雰囲気は推測できよう）の芸人が『紅桜夢』の一段を語りものに仕組んだ「黛玉葬花」を唱ったが、どうもあのうなり声と林黛玉のイメージとは結びつかなかった。その場の聴衆が堪能している醍醐味と原作の小説を読んで味わうそれとは自ずから違っているはずである。それでも中国の民衆にとっては、これも「雅俗共賞」のうちにはいるのであろう。

講釈師のことを「説書的」（「書」をかたるもの）といい、語りものの演目を「書目」というように、ほんらいの民衆の声の文化に属する伝統芸能においてさえ、文字の文化の影響は圧倒的で、その存在を前提にして、そこにすり寄っていく姿勢が顕著である。文字の文化を声の文化にパラフレイズしたもの、あるいはその逆が「雅俗共賞」ということかもしれない。しかし、それは「雅俗」が同じものを味わった、つまり「共に鑑賞した」ことにはならず、せいぜい同一の題材を共有しているだけにすぎないのではなからうか。

第15回国際言語学会議に出席して

水野 光晴

第15回国際言語学会議の開会式は、平成4年8月10日午前8時半からカナダで最古の伝統を誇るケベック市のラバル大学アルバート・ルッソー講堂に於て、厳かな雰囲気のもとに行われた。つづいて9時半から12時半まで一定のテーマにもとづいて総会が行われた。今回の総会のテーマは、初日が「絶滅に瀕する言語」について、E. M. ユーレンベック氏の司会により、N. ドリアン、K. ヘイル、C. クレイグ及びM. クラウツ諸氏が講演し、幾つかの提言がなされた。2日目からは「現代言語学における理論的立場」と題するテーマで3日間にわたって討議が行われた。このテーマで、11日に講演したE. ハチコーヴァ氏は、これまでの言語学上の諸理論を体系的に比較検討し、統合することの必要性を提案された。また、W. ハートル氏は統合論と意味論の関係について提案し、「文法は意味とは別個の自立的なものであるべきか否かという議論があるが、文法を意味とは無関係なものとする立場は、文法を規則に縛られた行動とする見解を人々にうえつけることになった。しかし、文法は意味を代表し表現する手段であるとする立場に立てば、SyntaxとSemanticsは互に接近し、言語は意味的に動機づけられたシステムであり、意味を表現する活動としてより現実的なものになるであろう」と述べた。このような見解は、筆者のように文法を研究する者にとって、今後の研究の励みとなり、新しい展望を与えるものであった。

昼食をはさんで午後からは、会場を本部ビルに移して展示発表と研究発表とが並行して午後5時頃まで行われた。筆者は11日に「固有名詞に関する認識論的研究」というテーマで、13日には「ボールロワイアル文法の言語学的意義」というテーマでそれぞれ研究発表を行った。参加者から二、三の熱心な質問を受け、これまで筆者が参加した国際学会のうちで最も充実したものになった。つづいて午後5時から9時までの4時間は、9つの会場に分かれてパネル・ディスカッションが行われ

た。筆者はこのうち特に意味論や統語論関係のものを選んで参加した。

12日の水曜日は休会で、幾つかのコンベンション・ツアーが企画されていた。筆者もそのうちの一つに参加し、ケベックの郊外のオルレアン島の寺院やダム、自然の風物などを見学して回った。とりわけ、雪国を思わせる家の構造、白亜の教会、教会の墓地内の死体安置場、路傍の美しいフラワー・バスケット等々、彼等の故郷ノルマンディー特有の風情を愉しんだ。

閉会式は14日午後4時半より、アルバート・ルッソー講堂で約1時間にわたって行われた。会長のR. H. ロビンスにつづいて、ヴィクトリア・フロムキン、ジョン・ヒューソン氏等の講演が行われた。今大会の議論の主潮は、構造主義との訣別、生成文法に対する反省が強く、それにひきかえ認知意味論的色彩、社会言語学的観点からあらゆる言語的要素を統合する必要性が前面に打ち出されていたようである。

その夜7時から会場をアッパー・タウンのシャトー・フロンテナックに移して、最後の晩餐会もたれた。このホテルはセント・ローレンス河の河岸の崖の上にそびえるケベックシティーの象徴で、天を突くような青銅色の屋根、幾つもの丸い小搭からなっている。とりわけ、夜空に浮かぶシャトー・フロンテナックのたたずまいは河岸の街路灯のイルミネーションと調和して印象的であった。

今大会は連日晴天に恵まれ、約50ヶ国から七千五百余名が参加したが、この人数は東京大会の際の参加者の約半数であった。これは、交通上の不便、東欧諸国の経済、政治情勢不安から参加者の大量キャンセルが続出したためであろう。今回の出張を通して、アメリカ言語学の重鎮であるビクトリア・フロムキン氏や、冠詞論の碩学ジョン・デキス氏御夫妻、神戸市外大の高原氏、大阪女子大の前田氏、東京農工大の橋本氏など内外の多くの方と面識を得ることが出来て感謝している。

神に選ばれたことば (4) —— 男性ことば ——

武内 道子

アラビアの挨拶ことばの特徴として、相手の言った句をそのまま返さないことを述べた（神に選ばれたことば(1)）。呼びかけ専用と受け手専用の区別があったり、前と後をひっくり返したり、接尾語をつけたりといくつかのバリエーションがある。彼らがことばを操るのにいかに細かい神経を使い、また楽しんでいるかを思い知る。彼らのことばのやりとりを見ていると、自分から止めたら失礼といわんばかりにえええと続くのであるが、同時にそこに彼らの表現がオーバーにさえ響く印象をもつ。

アラビア語は全体として、くり返しの好きなことば、したがって誇張傾向のある言語といえる様な気がする。動詞の形は主語と人称と数において一致し、しかも主格代名詞が必要である。すなわち、英語で文字通り翻訳すると、Allah he blesses you.となる。また、いわゆる不定詞形というのがなく、人称を表示した未完了形の動詞がいくつもつながっていく。たとえば、You must you come you visit him.という言い方によって、You must come to visit him.の意味を表すことになる。アラビア語の動詞表現のたたみかぶせる押しの強さといったものを見せつける現象である。

場所を示すとき「右手にある」で十分どころ「あそこに右手にある」、「学校のうしろにある」といえると思うが、「あそこに学校のうしろにある」という言い方をする。「火事はどこ？」と聞いたら、ハウスボーイに「それをごらんない、あそこです」と大仰な言い方をされてびっくりした。

形容詞に比較級と最上級の区別がない。「より」に相当するminがあったら比較級と解釈され、あとに名詞が続いたら最上級の解釈となる。さばくのイメージとして欠くことのできないらくだのことをジャマルというが これは「美しい」という意のジャミールと根を同じくする（つまりらくだは美しいものということ?）。「春は美しい」というのは、イツラビ・ジャミール（現在のことを述べる場合はbe動詞に当たるものは出てこない）、

「秋の方が春より美しい」は、ジャミールから変化したアジマルを使って、アッハリーフ・アジマル・ミン・イツラビとなるが、「秋は一年中で一番美しい」というときもアジマルを使って、アッハリーフ・アジマル・ファシル・フィサナ（ファシルは「季節」、フィサナは「一年中で」に当る）。

考え方をかえてアラビア語の形容詞は原型と強調形という二つの形があるという理解の方がよいのであろう。強調形を使うとき、必ずしも「何かより」とか「～の中で一番」という概念があるわけではなく、「非常に美しい」とか「絶対的に偉い」という意味あいのように思われる。スーク（市場）でハーダ・アルハス（This is cheaper.）と言って客寄せをする。「これはとても安いよ」と言いたいだけなのである。

そして、私が最も面白いと思うのは強調形が常に男性単数で表されるということである。形容詞は、あとに続く名詞、あるいは限定用法のときは主語と、数の性において一致するのであるが、強調形に限ってこの規則は無視される。誇張の傾向、ダイナミックな響きをして、アラビア語はどこか男性的な言語という、私の漠とした思いがにわかに力を得てくる気がする。男性優位社会のアラブ社会がことばにも投影されているようで興味深い。

四回に亘ってアラビア語の特徴を垣間書きした。他にもVSO言語であるとか、現代の書きことばと話しことばの差の方が、現代の書きことばと古典の間の差異よりも大きいという現実、かんなくずのような文字を右から左へ書いていくスタイル（石に刻んだから?）など アラビア語特有の現象がある。

アラビア半島北部を発祥地としてイスラムの発展とともに拡大し、征服者の言語として八世紀後半までに強固な地位を築いた。以後十二世紀までアラブ帝国—何故か響きもロマンティックな「サラセン帝国」—の公用語として、アラビア語はその最盛期を謳歌した。アラビア語のもとに花開い

たアラビア文化が、のちにヨーロッパ植民地を介して西洋文明の基になり、その西洋文明を取り入れて近代化を完成させたのが今日の日本であるこ

とに思い到るとき、アラビア語への私の興味はひとしおである。

Elle était belle, ce matin !

(今朝、彼女は美しかった。)

倉田 清

ほとんど毎年夏には、フランスのオルレアン(パリ南方約100キロ)にある「シャルル・ベギー研究所」に籠るのが僕の学問的な喜びの一つである。

先年、ある朝、研究所へ行くと、所長のオーギュスト・マルタン氏がめずらしく訪ねて来たオルレアン市長で作家のロジェ・スクレタン氏とおしゃべりしていた。途中からなので、話題がはつきりしない。「Elle était belle, ce matin !」(今朝、彼女は美しかったね！)と、所長が感動したように眼を細めて言うと、市長が「Oui, vraiment, elle était très belle !」(うんほんとうに、彼女はとても美しかった！)と感慨深げにうなづいている。何の話をしているのだろうか。どこかの女性が美しい姿を二人に見せたのか。老人たちの顔をかわるがわる眺めて、こちらもほのぼのとした気分になった……「彼女」とは？僕も知っている美人で教養豊かなマダム・ブーデかな、と考える。……しかし、その「彼女」とはオルレアン市を流れるロワール河であった。フランスの中部を流れ、大西洋に注ぐ一番の大河である。確かに、朝霧に包まれたポプラや柳の生えた小島をいくつも抱えたこの清らかな、優雅な悠々たる流れは、誰にも深い感動を与えてくれる。河は生きている。ロワール河はオルレアンの人たちにとって、またその流域に住む人たちにとって生きた存在であり、その流れは彼らの心の中にある。

少し哲学的な傾向のある印象主義の文芸批評家ジュール・ルメートル (Jules Lemaitre, 1853 - 1914) がロワール河を描いて、祖国とは何かを見事に語っている。《Quand j'embrasse la Loire étalée et bleue comme un lac, avec ses prairies, ses peupliers, ses îlots blonds, ses touffes d'osiers bleuâtres, son ciel léger, la douceur épandue dans l'air et, non loin, dans

ce pays aimé de nos anciens rois, quelque château ciselé comme un bijou qui me rappelle la vieille France, ce qu'elle a fait et ce qu'elle a été dans le monde : alors je me sens pris d'une infinie tendresse pour cette terre maternelle où j'ai partout des racines si délicates et si fortes ; je songe que la patrie, c'est tout ce qui m'a fait ce que je suis, ce sont mes parents, mes amis d'à présent et tous mes amis possibles, c'est la campagne où je rêve, le boulevard où je cause, ce sont les artistes que j'aime, les beaux livres que j'ai lus》(湖のように青く広がったロワール河、その牧場、ポプラの木、黄金(こがね)色の小島、青白い柳の茂み、軽やかな空、大気中に拡がった穏やかさ、昔の国王たちが愛したこの国の、ほどなく遠いところに、古きフランスを思い起こさせる宝石のようにはめ込まれた城などを考えるとき、私はこの母なる大地に対する限らない愛情にとらえられるのを感じる。ひじょうに繊細な、そして、ひじょうに強い根を私はいたるところに持っているのだ。私は祖国を考える。それは、現在の私をつくってくれたすべてである。私の両親であり、現在の友人たちであり、これからの友人たちである。私がそこで夢みる田園であり、私がおしゃべりをする大通りである。私が愛している芸術家たちであり、私が読んだ素晴らしい書物である。]

悠久の大河ロワールの流域には、ルネサンス期の王侯貴族たちの居城が点在しており、風土の穏やかな、端正優美なフランス語と明晰な思惟の、正に《フランスの庭園》(la Jardin de la France)と呼ばれるに相応しい。誰にも理解できるこの美しい文章を名文家のアナトール・フランス (1844 - 1924) は暗記していたそうである。

レメトールは、少々右翼的な傾向の批評家であるが、その祖国の概念は故郷への愛、つまり郷土愛に基づいている。そして、かつての日本やドイツのように郷土愛が非人間的な政治に至ることはない。天皇制軍国主義やナチのゲルマン民族の徹底した排他主義はまったくない。フランス語や英語のnationは、主権の保持者である「国民」であり「人民」であって、〈民主的〉という内容をもつ。それに対して、ドイツの“ナチオナル”は、強力な偉大な民族というイメージを伴っていて、民族的統一の概念に当てはまる。トーマス・マン(1875 - 1955) が、「ドイツではネーションの概念そのものがない」といった洞察は、「自由」とはその概念がなかった日本ナショナリズムについて、われわれに反省を促すものであるが、とにかく、イギリスやフランスではnationは国民、人民であって民族、国家ではない。偉大な哲学者ヘーゲルが『国家論』の中で、「個人の自由は全体の中でなければ存在しない」と言っているのは、残念なことであるが、ドイツでは郷土愛が国家や民族に容易

に結びつく傾向がある。しかし、フランスやイギリスでは、郷土愛は、山河や街を背景とした人々の平和な営みを示しており、絶対に政治性とは結びつかないのではない。素朴な深い感情がそこにはある。

「Elle était belle !」と感動的に語っていたスクレタン市長も、マルタン所長も、ナチス・ドイツの暴力に対して、人間の自由と尊厳を、その基盤である故郷を擁護したレジタンスの闘士であった。しかし、僕が敬愛した所長も市長も、今はない。

1542年ジャンヌ・ダルクが、また、1944年に一般市民がその侵略者から救ったこのオルレアンを訪ねる度に、ロワールに沿って散策しながら、時の流れを感じて、僕は果てしない水の清らかさを、火の明るさを、無限広さを憶う。そして僕は僕を思う。詩人シャルル・ベギーは、次のように詠っている。

Orléans, qui êtes au Pays de Loire !

(ロワールの国にあるオルレアンよ！)

★ お知らせ ★

第3回 英語教育研究大会開催

日 時 92年11月21日(土) 13:00~19:00

会 場 17号館215号室

後 援 神奈川県高等学校英語教育研究部会・神奈川県中学校英語教育研究会

第2回 海外講演会開催

日 時 92年11月24日(火)・26日(木) 17:30~19:30

会 場 20号館205号室

講演者 Rod Ellis 氏(テンプル大学日本校教授・応用言語学専攻)

尚、前号で予告いたしましたAlan C. Charity氏は、健康上の都合により中止になりました。

大きな森の小さな家

米重 文樹

モスクワから3等の郊外電車に乗って南西へ3時間半、カルーガ州の州都であるカルーガという町に着く。駅から歩いて3・40分、オカ川に面した高台に「宇宙博物館」というのがあって、有人人工衛星第1号（1961年）を打ち上げたロケット『ヴァストーク1号』の実物大の（おそらく）模型が、森の点在する中部ロシア平原が一望できる川岸にそびえ立っている。この博物館は、ロシアの宇宙工学の祖コンスタンチン・ツィオルコフスキイ（1857 - 1935）にちなんだもので、表面の焼け焦げた小さな人工衛星なども展示されていてなかなかおもしろい。博物館の裏手の庭から降りて木造の家並を抜けると、静かな日溜りの一角にツィオルコフスキイが住んでいた家があって、そのまま博物館になっている。宇宙飛行に関して彼が描いた理論的アイディアのメモ・惑星間飛行図などが展示してあって、これなどを見ているとこういう人は「宇宙人」にちがいないという気がするが、彼自身仕事部屋（屋根裏）に通じる小さなドアを「宇宙への扉」と呼んでいたとのことである（ちなみに、彼は昼間は中学で数学と物理を教えていた。彼の著作はほとんどが地元カルーガで出版されたものである）。

ところで、この家の中の各部屋は実にこじんまりとしたもので、ツィオルコフスキイの寝起きしていたベッドを見ると、これがまた可愛いベッドで、そう言えば、レーニンの故郷（ヴォルガ川中流に位置するウリヤノフスク）にあるレーニンの家博物館の中も同じ感じの小さな部屋に小さなベッドだった。小さなベッドと言え、新潟から直行便でハバロフスクに着いた日本人旅行者がよく泊まるインツーリストのホテルのベッドも可愛いベッドで、私のような小男でもいささか寝にくいくらいで、ロシア人はどうやって寝ているんだろうと思われた方も少なくないであろう（当然であるが、横向きで足を縮めて寝るしかない。余談であるが、ロシアではソファをそのままベッド代わりに使う人が結構多い）。こじんまりした

家、こじんまりした部屋、こじんまりしたベッド、あれだけ広い国で樹もいくらでもあるところだけに不思議な気がするが、これは、周囲の空間が広々していないと逆に落ち着かないというところと関連がありそう（田舎の村落配置が伝統的にそうであった）。「広々とした空間」をロシア語でプラスツールと言うが、これは「何ものにも邪魔されることのない自由」という概念と一体化した言葉である。

この「こじんまりした」家とかベッドは、通常の単語から派生した「指小・愛称形」という造語で表現される。例えば家であれば「ドーム」に対して「ドームク」、ベッドであれば「クラヴァーチ」に対して「クラヴァートカ」など、身近な事物に関して日常生活でよく使われ、人の名前の「愛称形」が友だち、夫婦、親子などでの呼び掛けとして、年齢を問わず幾つになっても使われるのが普通の世界であるのと相呼応している。

この事物についての「愛称形」のニュアンスはなかなか感得しがたいものであるが、いずれも、それが用いられる場面とか互いの人間関係の中で始めて生きるもので（「広々とした空間」の中でこそその「小さな家」、家だけを見て大きいだの小さいだの言っているわけではない。最後にトルストイの民話で『3匹の熊』（お父さんとお母さんと子熊）が住む森の中の家は「ドーム」はなく「ドームク」、すなわち、大きな森の小さな（自分たちの）家と言うことになる。